ヘッセン、ナッソウ	一二・八―一〇三・八‰
ウエストファーゲ	四一・二‰
ライン地方	一二・八―八二・八‰
ハンノーヴエル	八三・一‰

(二) 普魯西領域

東普魯西	一五四・〇‰
ポーセン	一三〇・四‰
西普魯西	五八・三‰
シュレジエン	八〇・〇‰
ザクセン	二六・三‰
シスレスウキヒ、ホルスタイン	一一・〇‰
ポンメルン	二・〇‰

尙 Vossius は一八九四年次の如き報告をなし居れり。

Vossius の統計（一八九四）

オストプロイセン	一三四・三‰
ウエストプロイセン	五八・三‰
ポンメルン	一一・〇‰
ポーゼン	一三四・〇‰
シュレーザエン	九〇・〇‰
ザクセン	二六・三‰
シュレスウキヒ、ホルスタイン	一一・一‰
ハンノーバー	八三・一‰
ウエストファーゲ	四一・二‰
ラインランド	八二・八‰
ヘッセン、ナッソー	一〇三・八‰

以上を通覽するに兎に角十九世紀の末葉頃の獨逸は殆んど各聯邦に亘りて風土病的に本病存在し、少なきは一％（ポンメルン）多きは一三・〇―一二〇・〇％（オストプロイセン及田舍の學校）概言すれば相當の發生ありたること明瞭なり。就中濃厚病竈地とも稱すべきは東西普魯西にしてボルトに依れば東部「トラホーム」はロシヤ、ポーランド及ガリヂアより季節的移動勞働者が山稼に往復する爲又西部普國に於ては伊太利勞働者により植付けられたる趣なり。其後星移り年代り殊に文化の普及と共に遞次減少したるは次の軍隊「トラホーム」推移諸表に依り立證せらる。

獨佛戰爭（一八七〇―七一年）以後の獨乙のトラホーム

年	入營時 P.M.兵員	入營時 除役 P.M.兵員	年	入營時 P.M.兵員	入營時 除役 P.M.兵員	年	入營時 P.M.兵員	入營時 除役 P.M.兵員
一八七五―一八七六	九・四‰	〇・六五‰	一八八三―一八八四	三・五‰	〇・四七‰	一八九一―一八九二	一・八‰	〇・四一‰
一八七六―一八七七	七・〇‰	〇・四八‰	一八八四―一八八五	三・七‰	〇・二九‰	一八九二―一八九三	一・四‰	〇・三一‰
一八七七―一八七八	六・二‰	〇・四七‰	一八八五―一八八六	二・七‰	〇・三四‰	一八九三―一八九四	一・五‰	〇・三一‰
一八七八―一八七九	六・六‰	〇・六一‰	一八八六―一八八七	二・〇‰	〇・四二‰	一八九四―一八九五	一・三‰	〇・三一‰
一八七九―一八八〇	六・〇‰	〇・五三‰	一八八七―一八八八	二・一‰	〇・三六‰	一八九五―一八九六	一・一‰	〇・二六‰
一八八〇―一八八一	五・三‰	〇・五四‰	一八八八―一八八九	二・〇‰	〇・三八‰	一八九六―一八九七	一・二‰	〇・二四‰
一八八一―一八八二	四・四‰	〇・四七‰	一八八九―一八九〇	二・〇‰	〇・三二‰	一八九七―一八九八	〇・九‰	〇・二一‰
一八八二―一八八三	四・三‰	〇・四六‰	一八九〇―一八九一	一・九‰	〇・三〇‰	一八九八―一八九九	〇・七‰	〇・一四‰
						一八九九―一九〇〇	〇・六‰	〇・一二‰

尙各部隊の本病發生狀況如次。

各部隊に於ける「トラホーム」統計

軍隊名	場所	患者數（P.M.兵員）	軍隊名	場所	患者數（P.M.兵員）
I アルメーコルプス	オストプロイセン	五・三四‰	VI アルメーコルプス	シュレーザエン	一・四〇‰
XVII 同	ウエストプロイセン	四・三九‰	XVI 同	ロートリンゲン	〇・八八‰
II 同	ポンメルン	二・六五‰	VII 同	ウエストファーレン	〇・六四‰
V 同	ポーセン	二・三五‰	X 同	ハンノーバー	〇・五八‰
III 同	ブランデンブルグ	一・六七‰	IX 同	シュレースウキヒ、ホルスタイン、メクレンブルヒ	〇・四九‰
IV 同	ザクセン	一・四一‰	XI 同	ケツセンカツセル、ザクセン、エルネスチン線	〇・三九‰

軍隊名	場所	患者數(P.M.兵員)	軍隊名	場所	患者數(P.M.兵員)
XV アルメーコルプス	エルサス	〇・三四 ‰	XIII (K.W.) アルメーコルプス	ケーニヒリツヘヴユルテンブルグ	〇・〇四 ‰
6.K. 同		〇・二二 ‰	XVIII	グロース、ヘツセン、ヘツセン、ナツソー	〇・一〇 ‰
VIII 同	ライインランド	〇・二〇 ‰	XIX (IIK.S.)		〇・一二 ‰
XII (I.K.S) 同	ケーニヒリツヘザクセン	〇・一八 ‰	I バイエリツセコルプス		〇・一八 ‰
XIV 同	グロース、バーデン	〇・一七 ‰	II バイエリツセコルプス		一・一〇 ‰

前表に依れば、今より二十七、八年前同國軍隊には、少數ながら而も國内各部隊に本病の發生ありたるも、爾後漸次減少したるものゝ如し。一般民衆「トラホーム」に關し近着國際衛生報「第十號」には東部プロイセン最も多く、一九〇五年三・六%の記載あり。又一九一七——一九二四年の間同方面の「トラホーム」は四・二二%(Hirschfeld)と稱せらる。各大學眼患者對%を見るにキヨエーニヒスベルヒ三〇・〇グライフスワールド一〇——一五・〇、ブレスラウ三——四・〇、其他の大學にては何れも〇・×又は皆無(向井、昭利二年中央眼科醫報)とせらる。尙普國長官の報告によれば一九二五年ババリア、バーデン、メクレンブルヒ、シユヴーリング及ブルムシユウヰク等に、少數の發生ありと云ふ。

二、ロシア

露西亞には本病多く、ボルトの著にも『ロシアには「トラホームフライ」の地方なし』と記載せり、就中多きはクルミヤ半島、次ぎはベデルスブルグ及コーカサスの軍隊地方、並更に一層多きはシベリア地方(Kershbaumer夫人)及フインランド地方(Hirschberg)なりと。

ロシアには又盲者多く、Skrebitsky は一八七七年軍隊内に多數の盲者あり、其内五・〇%は「トラホーム」に因るものと報じ、又同氏は一八七九——八〇年同國中央貧困兵家族保護局(Hauptkuratoriumzur Versorgung notleidender Soldatenfamilier)の囑託に依り調査の結果、盲者四〇、〇〇〇を發見し、天然痘、濃漏眼及「トラホーム」に因するものとなせり。

又オデツサの Walter はロシヤに於ける全盲者の一八——一九・〇%は「トラホーム」に依るものとなし、Sergieff, Aljantschikoff, Kuschelff等は三〇%、處によりては四〇——八二・〇%に昇ることを報ぜり。

Putiata, Kerschbaumer はマリー女王盲者保護局の報告に依りロシヤ各「ガヴアーンメント」の「トラホーム」は全眼病患者八〇〇〇P.M.、本病に依る失明を全失明の九二・〇%と算せる位にして埃及、臺灣等の盲者に關する狀況を偲ばしむるものあり。

Eible によれば一八二五年ロシヤの醫師ラングは『クリミヤ地方に於ては吾人の考へ得ざりし時代より既に散在性に「トラホーム」ありて主として貧民階級に流行し得たり』と云へり。

殆と全國に蔓延し最も重症にして驚くべき地方は Hirschberg, Botschkosky の統計によれば次の如し。

クリム地方	二六・一‰
ベサラビエン	一七五‰
アルソー	一二四‰
リーブランド	三三二‰
クルランド	四三・一‰
カザン	四九六‰
フインランド(ヘルルシンクフオルス)	一〇二‰
セント、ピータースブルグ	九五‰
モスコー	八六‰
クルスク	五〇三‰

Iskerski の研究によれば ロシヤの軍隊には一八九〇年には四五、四九〇人の「トラホーム」患者ありたれども一九〇一年には只七・二%の「トラホーム」患者を發見せるのみと。

一九〇九年 Reich はセントペテルスブルグの軍隊に二・八%オデツサの軍隊には三・一%を發見せりと。

Ljubinski はロシヤ海軍の「トラホーム」統計を示し、一八八一年には一・六%の「トラホーム」ありしも、一九〇〇年には〇・二%に減ぜりと。

尙同氏は一八八九年黑海艦隊の二、六九六人の兵員に就て檢査したる結果一一三人の「トラホーム」即ち三・八%を發見せりと云ふ。

Oehrn は Oettingen 及 Samson が一八五六——五九年全住民の「トラホーム」に就て一%、地方によりては四——五%を發見したる旨を報じ、又 Reiher は村落學校等の小供に就き檢査の結果六二・〇%を發見せり。尙 Oehrn は一八九二年多數學童を檢査し南部リーヴランドにては一一・四%、北部にては二三・八%の患者を發見し、且「トラホーム」は南部より北部に向つて多きこと、文化が南部より北部に向つて薄らぎ行くと一致せる旨を附加せり。其他太公領にも「トラホーム」多し。

シベリアは本病濃厚地帶にして Kerschbaumer 夫人が一九〇〇年異動眼科醫團の主となつて同地に入り、「トムスク」行政區の移住民に就き檢査の處、只一人の「トラホーム」なき者を發見したる位なり。

尙各行政區の「トラホーム」患者は Hirschberg に依れば大要次表の如し。

モスコー	二四——	四〇‰
ロストー		六〇‰
セントペテルスブルグ		九六‰
ヘルザンゲフォールス		一〇二‰
サラトー		一一四‰
ロツヅ		一一六‰
リバウ		一二一‰
ワルシヨー		一二四‰
ンバール		一四六‰
ドルパート	一八〇——三五	三〇〇‰
リガー	二〇	二〇〇‰
カザン	一八〇——二二	二二〇‰
キユー		二五〇‰
ペザラビア		二五〇‰

（全眼病患者に對し）

同國海軍に於ては漸次減少を示せること如次。

ロシヤ海軍「トラホーム」統計 (Ljubinski)

年	%	年	%	年	%
一八八一	一・六	一八八五	〇・七	一八八九	〇・六
一八八二	一・六	一八八六	〇・三	一八九〇	〇・二
一八八三	一・一	一八八七	〇・五	一八九一	〇・三
一八八四	一・五	一八八八	一・二		

最近の狀況を調査するに次表の如く、元より各地の系統的調査成績にあらずと雖、以て同國至る處罹病高率なるを知る可く平均三十九%を示せり。

露西亞各地最近の「トラホーム」分布

年次	流行地	人口	患者數	%	報告者
一九一三	ヤドリン	一八五、八〇六	六三、一二八	三三・九八	Dear W. R.
——	チビルスク	二〇一、一六三	六〇、五五三	三〇・一〇	
——	ツエカキサリー	一五七、四四〇	四二、二一四	二六・八一	
——	コツモデイー、ミニアンスク	一二〇、〇〇〇	二八、〇二八	二三・三六	1926
——	カザン（ガリーンメント）	二、四二七、八二七	四二三、三六四	一七・四四	
一九二三	チユヴツシユ聯盟	—	—	七五・〇〇	同
一九二三—二四	サラトー、ガヴーンメント	患者 九〇三 女 一、五八三 計 二、四八六		四五・八〇	クスリヤンスカヤ
一九二四	ウガルガ地方	住民ニ對シ		七一・四〇	チルコースキー
一九二〇	イクト地方	同		三九・〇〇	チトー、イクトスキー
一九二六	西伯里亞學童	同		三・二一 一一・二〇	イリノフ
同	ブルヤット民族	同		三〇・三〇	同
同	同農民部落	同		一一・〇〇	同
一九二三	西伯里亞シラ地方	同		九三・〇〇	ツエプリン
一九二六	ボリソー地方			三五・〇〇 三九・〇〇	ロードスタイン
同	同	檢診人員 二、三三四	二、二八一	九七・〇〇	ロシホル
同	サラドー學童	—	—	八・六〇	サポスチナ
一九一三—二二	サラドー、ガヴーンメント	（眼患者對）一〇・九五％		七・〇〇	パリシユニコフ

以上平均（勿論％の平均）三九・六三

尙クーバン、コーカサス地方にも非常に多し（ギユールナサルヤン、ユヤポースキー一九二七年）

又勞農露國に於ては本病の屆出を强制せるが最近の屆出狀況如左。

	一九二三年	一九二四年	一九二五年
届出患者數	一三三、八八七	五一八、一一二	七九二、四七六

而して此の增加は届出法改正の結果ならんとあり。國中到る處本病あるも東部露西亞殊にビヤトカ、ヴヰトルガ、ウラル、中央ヴオルガ地方に流行し、中央露西亞及ウクレイン地方より西部に向つて增加すと云ふ。尙各地方別届出患者數は左表の如く、只單に數字のみにて比例なきも國内到る處今尙本病の風土病的發生あることを知るに足る。

勞農ロシヤに於けるトラホーム罹病者地方分布表

	一九二四年	一九二五年	一九二五年ニ於ケル一〇〇、〇〇〇ニ對スル比例
東北部	三、六一一	四、四八七	一九一
西北部及ヒ白露	一二、八〇〇	一七、一一四	四七九
中央工業地帶	三六、三八六	五八、五三三	六五八
中央黑土	一七、九七九	四三、二五一	二二七
中央ヴオルガ	一五、六〇一	二四、九四八	二三二
下方ヴオルガ	八五、一二二	一二七、六三七	一、三六八
ウイアトカヴイトルガ	三六、七三一	四〇、二〇〇	七九三
ウラル	七一、四九七	一一五、五八七	三、四〇三
北コーカサス及ヒドン	七三、二一四	九三、三六五	一、一八五
ウクレーン	九、九四九	二四、九八三	三三九
トランスコウカサス	四九、五九二	七〇、二一六	二五四
シベリヤ	三〇、六六〇	四五、九八二	八一一
中央亞細亞	五五、六二九	六五、九一〇	五九一
水路及鐵路	一八、六九三	四六、八二七	四一五
全國	六四八	三、四三六	—
	五一八、一一二	七九二、四七六	五九二

尙フインランドの近況に關する報告を見るに、往時は濃厚病毒地帶なりしも爾後減少せるものか一九〇八——二四年學童檢査の結果は五%より一・五%に減ぜりと云ふ勿論部分的現象なるが如し。

三、シスレタニア（オーストリア）

Rocusは第八回萬國衞生、社會關係學會（一八九七年ブダペスト）に於てアルペン諸國は本病少なし、「トラホーム」多き地方は勞働者により持ち來さる。南部にては「スラブ」人北部にては「ユダヤ」人に本病多く又軍隊にも本病ありと報ぜり。

Bock及Roussは同國の「トラホーム」病毒地方を次の如く南北に分ち其數を擧げ居れり。

南部		北部	
ダルマチエン	八四・四%ㇾ	ベヨウメン	四〇・〇%ㇾ
トライント及チロール	四〇・〇%ㇾ	ガリジエン	一一〇・〇%ㇾ
ボスニア及ヘルツエゴヴキナ	四〇・〇%ㇾ		

オーストリア、地圖を南西より見る時、ティロールではイタリアより本病侵入したるものゝ如く殊に本病多き地方はイストリエンダルマチエン、ギヨルツエル、トライストで、此の地方に對してはイタリア及東部の大陸内部地方が母地を爲しグライン及南部スタイヤーマークに對しても亦同樣なるべし。殊に南部クラインに「トラホーム」多きは水に不自由なる爲悉く不潔なるに起因すべしと云ふ。

Bockはクラインで海拔一〇九〇mの處に尙「トラホーム」を農夫其他の勞働者に發見（一九〇〇）、殊に惡性且多數に蔓延せるを報ぜり。

スタイヤーマークの東部ケルンテンの大部、獨領ティロール及ヴオラルベルグ、ザルツベルグ並上部墺國は本病少なくベヨウメンは中位に在り。

而して重要なる「トラホーム」地方はReisingerに依ればエルブ平野にして、ライトメリツツ及其支流の地方なり。海拔二〇〇m以下にして患者は一二・〇—一四・〇%（眼患者對）、其他エルベ平野のプラトウ（二〇〇—三〇〇m）、南東ベヨウメン（三〇〇—四〇〇m）にも「トラホーム」あり、又北東ビヨウメンには本病少なくBeyerに依れば一・六六%なりと。

乍然シスレタニア中本病最多なるは何と云ふてもガリジアなり。同地のレムベルグ病院にては一八九二——一八九八中二八・五（全眼患）の患者ありたりと云ふ。

V.Reussはシスレタニヤ諸地方の「トラホーム」を次の如く發表し居れり。

シスレタニヤ諸國の「トラホーム」統計

ウエルシユテイロール	四〇・〇%	（全眼病患者に對し）
ノルドテイロール	四・〇%	
ザルツベルグ	七・〇%	

オーバーオエステルライヒ	一五・〇‰
ケルンテン	一一・六‰
スタイヤーマーク	二九・五‰
クライン	六六・七‰
ダルマチエン	八四・四‰
ベヨウメン	四〇・〇‰
ヴキーン	三五・九‰
西シユレーヂエン	一〇・〇‰
東シユレーシエン	四〇・〇‰
西ガリヂエン	一一〇・〇‰
東ガリヂエン	一一〇・〇‰
ハーゲンランド或地方學査	一五——二五‰

以上に依て見るにシスレタニアに於ても十九世紀の末葉の頃は大體に於て四—八‰多きは一一・〇‰の患者を出したるものにして之れが流行母地として伊太利勞働者を考へ居るが如し。（一九二五年）

其後同國の「トラホーム」消長に關する充分なる資料なきも、國際年報第十號に依れば、一九一九——一九二五年間屆出られたる患者數は少數なりと雖も增加の傾向あり、又一九二四年ハーゲンランドの或る地方學童を檢査せるに檢査人員二五五七對患者六一六即一五—二五‰を發見し、一九二五年は猛烈なる反「トラホーム」運動の結果二一八即1/5に減ぜりとの記載あり。由是觀是同國に於ける「トラホーム」は爾後多少の減少ありたるも、然も今日尙國內に相當の患者あることは忌み能はざるべし。尙最近同國大學眼科の眼患對「トラホーム」患者率を見るに（向井昭和二年中央眼科醫報第十九號）ヴキン大學にて〇・四‰を出せる外他の二大學校には本病なしとのことなり。

四、トランスレタニア（ハンガリー）

主なる病竈地として次の地方が擧げらる。

一、ドラーベ溪谷に於てはクロアチエンよりアトリアチツク海に及ぶ地方

二、タイス及ドナウ間、セルビアとトルコとを連絡する地域

三、ジーベンブルグの「トラホーム」地域はルーマニアの境界に連る部

四、北方ハンガリーのカルパーテンの「トラホーム」地域は北ヨーロツパの「トラホーム」地域に繼續する部等

其他のハンガリー各地は大體に於て本病少なし。更にFeuer（一八九五年地方衞生視察員として）は大體に於て二大病竈地を區別せり。

一ツは南部の原發的病竈地方たるアルフヨウド（ドナウとタイスとの間沼なき低地）、一ツは北部のブリヴキガイヤー地方（中部コミタータ）を中心とした高原地なり。

兩者共農民及下級勞働者居住し、內「ハンガリー」人及獨逸人より成る南部病竈地帶の住民は大體に於て富有且清潔加ふるに學校教育も相當行き屆き居るに反し、「スロワツク」人及「ジユワーブ」人より成る北部病竈地方の住民は何れも非常に貧困且不潔にして、禽獸と同樓し、土地にて充分の生活困難なる處より、南部ハンガリー地方に野外勞働者として出稼する爲め南北「トラホーム」病竈地方の聯鎖をなしつゝあり。從て北部勞働者は本病をアルフヨウドより鄕地に持ち歸り、原發地たる低地より却つて劇烈に蔓延しつゝありとのことなり。

Feuerは有病地方を旅行して多數の老兵が瘢痕「トラホーム」に罹り且兩眼失明者多きを發見せりと云ふ。

住民の感染率に就き顯著なる事例なきもFeuer（一八九五）はトロンタール南部三地方民九五、〇〇〇人を檢査し平均五‰の「トラホーム」患者を發見せり。

爾後同國內に於ける「トラホーム」の消長を知るに足る材料を發見せず。

更に同國軍隊の本病を見るに元來至つて少數なるも、さる代り一八九一年來殆んど著しき消長なく、更に之を各部隊別に見ればブダペスト二三・九‰レムベルグ一四・三‰にして最も多く、他は少なし。之れに反し墺匈國海軍に於ては著しき減少を示し一九〇〇年頃は殆んどなきに近き好成績を呈せり。（次の各表參照）

墺匈國軍隊一八九一年來の「トラホーム」消長表　（Hoor）

年	入營時‰	實數	兵役不能及擬兵トシテ損失‰	年	入營時‰	實數	兵役不能及擬兵トシテ損失‰
一八九一	七・一	七四八	二・六	一八九六	五・三	九八四	三・四〇
一八九二	七・五	六七五	二・三	一八九七	三・九	五八一	二・〇〇
一八九三	七・七	六七一	二・三	一八九八	二・九	六五〇	二・一九
一八九四	七・一	九一九	三・三	一八九九	四・〇	七七七	三・〇二
一八九五	七・四	一、〇六七	三・八	一九〇〇	五・〇	九〇〇	二・六二

同各部隊（アルメーコルプス）の「トラホーム」（一八九一——一九〇〇毎年平均）

隊	所在	P.M.	隊	所在	P.M.
IV コルプス（ブダペスト）		二三・九	K コルプス（ヨセフスタット）		二・〇
XI 同	（レムベルグ）	一四・三	XV 同	（サラエヴォー）	一・九
X 同	（プルツエミーズル）	八・五	VIII 同	（プラハ）	一・八
XIII 同	（アグラム）	七・七	陸軍分遣隊ツアラ		一・六
VII 同	（ラメラバール）	六・六	XII コルプス（ヘルマンスメット）		一・六
I 同	（クラコウ）	四・〇	III 同	（グラツツ）	一・三
V 同	（プレッスブルグ）	三・九	XIV 同	（インスブルック）	〇・四
II 同	ウキーン	三・六			

オーストロ、ハンガリー海軍「トラホーム」累年消長

一八七〇——一八七九	陸	三六・八七	
	上	二七・二一	〃 P.M.
	海	四一・六四	〃
一八七〇、一八七一、一八七四		殆んどなし	
一八七二		七八・〇九	〃
一八七五		四二・七〇	〃
一八七九		二四・四五	〃
一八八〇		三二・九九	〃
一八八一		二七・一〇	〃
一八八二		五・五〇	〃
一八八三		七・〇一	〃
一八八四		一・八二	〃
一八八五		一・五三	〃
一八八六	一九五人		
一八八七	四三三人		
一八八八			
一八八九			

一八九七	〇・九九	〃
一八九八	一・一八	〃
一八九九	〇・九〇	〃

五、土耳古

Millingen は一八九〇年コンスタンチノープルに於て五九一七眼病患者を檢し一〇九二即一八・三%の「トラホーム」を發見し、此を人種的に區別報告せり。其他土耳古に關する記載を發見せざるを遺憾とす。

六、ルーマニア

Crainiceanu は Jassy で外來眼病患者二、一七六人中一、一三九人即五二%の本病患者を發見せり、蓋し相當多きものと見るべし。其他ブッカレストには一〇%モルドウ殊に其北方にては三〇—五〇%を算すと云はる。最近の報告に依れば（マノレスク一九二六年）一九二三年全帝國患者一二、〇一二住民對七・二八(%)、ボポビチーに依れば全住民千六百萬中八萬の患者ありとせらるゝも病院又は外來に來りし患者よりの計算なれば其眞相を知り難く、要するに相當の流行あるものと見て差支なきが如し。軍隊にては一九〇一年三・一（全眼病對）なりしが一九一〇年で一・六%に減じたりと云ふ。

七、ブルガリア

Millingen は同國人と他國よりの移住者との本病を比較報告せり。即

ブルガリア人	トラホーム	四四%	（住民對）
ルーマニア人	同	六八%	同
ギリシヤ人	同	四五%	同
トルコ人	同	六〇%	同

右に依れば同地方の「トラホーム」は相當濃厚にして到底歐洲地方の比にあらざることを知るに足る而して此の事實は恐らく一九〇〇年頃の事に屬すべきが、爾後の消長を知る材料を發見せず。

八、セルビア

同國に關しては信ずべき統計材料を發見せず。

九、ギリシヤ

に古來本病多かりしことは史實の部に述べたり。乍然爾後同國に關する文獻の信ずべきものを發見せず。國際年報第十號に依れば同國中

殊に甚しく侵され居るは（一九二四年）

チオス群島	三、〇〇〇人
ミチレン群島	二、〇〇〇人

なり。

其他クレト群島及ローリオン地方なりとあるも單に數を列べしに過ぎず。

十、伊太利

北部は少なく南進するに從ひて多く殊に海岸就中イオン、チレン地方及テトリアチック海方面に多し。

Minciは一八九一年二二九地方に就き調査の結果少なきは二%多きは三六%（全住民對）の患者を發見せり。

Basso（一九〇一）は北方のゲヌア及其周圍に於ては全眼病一一〇%、ロンバルデーに於ては全眼病の一二六%なりと報ぜり。

南方サルヂニア及シシリアに於ては住民の三六・六%なれどもCaliariはパレルマに於ては全眼病の四九一%なりと云ひ、Marchettiは五五〇%なりと云ふ。

要するに一九〇〇年前後迄は尚多數の患者あること明瞭なり。尚同國軍隊の近年に於ける「トラホーム」消長如次表。

伊多利軍隊「トラホーム」消長表

一八九〇年	二・四九‰
一八九一年	一・八四‰
一八九二年	一・六三‰
一八九三年	一・五一‰
一八九四年	一・六〇‰
一八九五年	一・五五‰
一八九六年	一・九五‰
一八九七年	一・二九‰
一八九八年	二・一三‰
一八九九年	一・四〇‰
一九〇〇年	一・八四‰

尚同國最近の蔓延狀況は如次

年代	報告地	%	報告者
一九一九—二三	カタニア學童	二七・五〇	モルガノ（一九二五年）
	同州	九—二二・七〇	同
一九二四	タラント學童	二〇・三七	Zentr. bl.f.e. Opht. Bd 17
一九二六	サルデイニア島ノサツサリー	二〇・〇〇	マギオール（一九二六年）
一九一八以來	ローマ	七・一〇	Sullica Ciccolo 1925

マルタにも一九二二—二五年間五四二—一二八二名の患者屆出あり。即地方に依つては今尚那翁時代に劣らざるものあり。

十一、スペイン

同國は七一一—一〇三一年の間アラビアの支配下に屬せし關係上「トラホーム」多し又同國は盲者多きこと如次。

同國盲者所屬國別人口十萬對

同國人	一四八
ハンガリー人	一二八
オーストリア人	九四
イギリス人	八八
ドイツ人	八五
フランス人	八四
ベルギー人	八一
イタリア人	七五
オランダ人	四四

而して其原因を次の如く發表せり。

「トラホーム」	九一
膿漏眼	五六（盲人千人中
痘瘡	四三）

Herschbergは Carreras, Hrago, Menacho, Osis 等の報告を總めて次の如く報告せり、

北部に於ける	ビルバオ 六四—四七‰
	バルセロナ 六三—一二〇‰

サンセバスチアン	五〇――	一二%
マドリット		八〇‰
ヴアラドリド		二六六・五‰
セヴイラ		一〇二・五‰
カデイツツ		九〇‰

尙最近（一九二四）の狀況を見るに（國際年報）國內に四九、四一三人屆出患者あり。

今各方面より集め得たる同國最近の「トラホーム」は次の如く

年次	眼患者對	報告者
一九二五	一・四二――五・六六%	八・七%	ウエスカムプ　一九二五
一九二七 同	五一・一〇%	ツアバリア、アルベルト
同 アンチアゴー州眼患者對	三・〇〇%	デユツセルドルプ、マルセロ
同 ジュジュイ州眼患者對	八・九〇%	同
一九二六 ソリス（住民眼患不明）		アルヴレツツ
同 レオン 同	一・四二%	同

報告者により極端なる差あるも地方的には尙相當濃厚の蔓延あるものと見るを得べし。

十二　ポルトガル

Gam Pinto の研究によればリサボンにては一二〇%なりと云ふ。

一九二四年ムチノ、マリオの報告に依れば眼患者對六・〇――五・〇――三〇・〇%軍隊には〇・〇五%の「トラホーム」を見ると云ふ。

十三　瑞西

殆んど「トラホーム」なく唯イタリアに隣接せる地に僅かにあるのみと云ふ。

Bauer（一八八一――一八九九）は東部瑞西の海拔四〇〇m以上の高地に於て三〇〇人の「トラホーム」患者を發見せしも瑞西人は僅々八人にして之を同國人に割當てるときは一般住民の〇・一五%の割合なりと報じベルンの「トラホーム」統計は全住民に對し〇・〇三%とのことなり。

最近同國にては本病屆出を命じ居れるが一九二五年には一六名の屆出あり。由是見れば少なれと雖尙且本病あること明なり。

十四　佛國

一部を除きては殆んと「トラホーム」なしと。然も南北の二「トラホーム」地域に分たれ南方は地中海に續く地方にしてメントペリールには一〇五%にして北方はベルギーに接する部分なり。

ペリーの「トラホーム」統計は全住民に對し一七・〇%を示す尙、一般住民の「トラホーム」は臨床上の見地より推して獨逸に於けるそれと大差なしと。(Boldt)

ナポレオン戰爭當時英獨の醫師はフランス病院に於て多數の「トラホーム」患者を發見し居るに係らずフランス醫師はフランスには「トラホーム」なしと云へる趣にして之れ等の事實は同國「トラホーム」推定上多少考慮の價あらんか。軍隊には極めて稀なり、選兵に注意するが爲なるべし。

尙最近の狀況を見るに一九二四年七四人一九二五年五四人の患者あるのみなりと云ふ。

十五　ベルギー

「トラホーム」は相當に多く、Denoffe によれば一八八一――一八九〇年の間同國「トラホーム」は減少せずと。

一般住民の「トラホーム」統計は（Chibret）

地方	患者
ブルツセル	八〇‰
リエヴヴエン	一四〇‰
アントワープ	一〇〇‰
ツルナイ	四〇‰
モンス及ナムール	五〇‰
クルトレー	八〇〇‰
リンブルグ	二七八‰

の狀況にして少なきはモンス、ナムール及ブルツセル地方なれども其他の地方は何れも一〇・〇%以上を表はし甚しきは八〇・〇%の罹國的高率を示せり。

近況に就ては一九二四年七三人同二五年五四人の屆出あるも全國の一般「トラホーム」を知る資料たらず向井に依れば極めて少なしと云ふ更に同國軍隊の狀況を見るに次表の如く累年著しき減少を來せり蓋し同國が軍隊に對し一八三四年以來特別の注意を拂ひ鋭意各種の豫防施設を施したる結果なりとせらる。

ベルギー軍隊トラホーム累年消長

一八四〇年	二〇〇‰
一八四五年	一六六‰
一八五〇年	一一一‰
一八五五年	三〇‰
一八六〇年	〇・九八‰
一八六一年	二・五三‰
一八六二年	一・五七‰
一八六三年	一・五四‰
一八六四年	〇・九九‰
一八六五年	〇・六六‰
一八六六年	〇・六五‰
一八六七年	〇・六五‰
一八六八年	〇・八九‰
一八六九年	〇・七八‰
一八七〇年	〇・六七‰

同國の海軍も亦一八四〇年には二〇〇‰なれども一九〇〇年には〇・六七‰に減少せり。

十六　オランダ

ベルギーの如く甚だしからず、只海岸地方には相當に多し。其平均罹病率は Mellingen によれば四〇‰なりと云ふ。然れども其の後減少し殊にアムステルダムに於て然りとす。リツタによればアムステルダムに於ては一八七五年金眼病患者に對し四四〇‰なりしもの、一八九六年には一四七‰に減少せり。又最近に於ては一九一四年學童七〇、〇〇〇を檢し四五・八‰の患者を發見し五ヶ年に亘り强制治療を施して四・一‰に劇減せしめ得たりとの報告あり。最近アムステルダムの患者は

	一九一七年‰	一九二二年‰
クリスト教徒	〇・六八	〇・一八
ユダヤ人	五・〇〇	三・九一

なりと云ふ。

十七　イギリス

ナポレオンの埃及遠征後は相當多かりしも爾後減少又は消失し、スコツトランド、アイルランドには尙殘存す。

Sydneg, Stephenson によれば金眼病患者に對し、	
イングランド	六・〇‰
スコツトランド	九・三‰
アイルランド	二六・四‰

英國軍隊には「トラホーム」なしと云ふ。

近況を知る資料なきも恐らく衞生問題となる程度に至らざるものなるべきか。

十八　デンマーク、スエーデン及ノールウエー

Van, Millingen によれば全住民に對し

スエーデン	二・三‰
ノールウエー	二・五‰
デンマーク	

にして殆んど「トラホームフライ」の狀況なり。然るに北米に於ける同國人は本病に對し非常なる素質を有すと云へば右報告も必ずしも鵜呑みし難きが如し。

十九　チエツコスロヴアキア

此の新興國に於ても本病は少なきものゝ如く古き記錄は勿論なきも最近の狀況を見るに或る代表的地方に就き檢査の結果は

住民	三八七〇、〇〇〇中	
「トラホーム」	六〇、〇〇〇即	一・五五%

と報告せり（註曰檢査したる箇所は少なき地方か多き地方か？）

尙國內分布の狀況を見るにボヘミヤ、モラビヤ、シレリヤ、サブカーパシヤンルテニヤの各州に發生あれどもスロヴアキア州最も多く從つて重大視せられて居れり。（國際年報）

二十　ポーランド

十八世紀の頃は相當濃厚に存在せるものゝ如く、當時東部普國の「トラホーム」は露西亞及ポーランドより季節的出稼勞働者、所謂「ザクセンゲンカー」の類によつて移殖されたる記錄（Boldt「トラホーム」史）あり。爾後此國の「トラホーム」消長に關し據るべきものなきも最近の狀況を見るに公衆衞生事業局は公立學校、養育院、孤兒院等に就き檢査中なるも確信を置くべき數字を示さず。而して一九二四年

檢査兒童	一四七七	患者	四八五	即	三三%

を發表せり。蓋し多き方の一例を示せるならんか。兎に角同國にては本病を公衆衛生上重要問題視居ることは事實なり。屆出に係る患者地方別如次

	一九二四年	一九二五年
東部	五七八	一〇一三
中央部東部	四五九	一二四〇
同西部	九八六	一二〇二
西部	九二一	一二九一

又ポーランドのワルソー大學全眼病患對「トラホーム」患者は一〇%との報告あり（昭和二年向井）

二十一　勞農社會主義聯盟

黑海より北東に向つて扇狀に擴大せる地理的關係上クリミヤ、露西亞、西伯利亞に於ける事情はやがて當聯盟に對する事情として受取り得べく、事實又「トラホーム」は可なり濃厚に蔓延せる模樣なり。

此の聯盟にては本病の屆出を强制し居らされども一九二四及一九二五年の「トラホーム」に關する報告あり（國際年報）。一九二四年患者總數（實際は尙多かるべし）五一八、一一二同二五年七九二、四七六にして一九二五年同國の人口一三三、九〇五、八三〇と照し六・〇%に相當せり（十六地方の報告にして一地方少なきは一〇〇〇——二〇〇〇多きは一二〇〇〇——一三〇〇〇を算す但し地方別人口不明）

二十二　エストニア

トルパートには已に十七世紀本病に關する報告あり。現在減少せるも尙本病あり（クリクス一九二五年）

二十三　リツアニア及ザール領地

リツアニアには本病多きものゝ如く人口二、〇六二、〇三八の處一九二一年以來次の如き屆出あり。

	患者
一九二一年	—
一九二二年	—
一九二三年	一、七六四
一九二四年	二、三七五
一九二五年	二、一一八

二十四　ウクレイン

古き事項に就ては露西亞の記事を以て代表せらるべく最近時に於ても一九二四年四九五九二、一九二五年七〇二一六の屆出あり相當濃厚なるものゝ如し。

第二　亞細亞

一　シベリア

に關しては前段述べたるを以て略す。

二　スミルナ（小亞細亞）

Van. Millingen によれば當地の「トラホーム」はコンスタンチノープルよりも遙かに多しと。

三　シリア、パレスチナ及チプルス（英領）

Th. Germann によれば一八九六年の診斷旅行の記錄にパレスチナに於ける眼病患者の多きにては幾愁せりとあり。何れも學校に於ける檢診結果なり。

	眼病		「トラホーム」	「トラホーム」ヨリ角膜疾患ニ	「パンヌス」
シリア	三三・六八		一五・〇〇	一二・六二	六・〇〇
パレスチナ	六〇・六七		五一・一八	二四・七七	九・六二

尙最近の狀況は國際年報所載を見るに一九二三年——二四年の醫事報告中顆粒性眼炎に關し

	一九二三年	一九二四年
ベイルート	—	—
トリポリー	—	一八
南レバノン	二五	七五
レバノン高地	四二	三五
パカー	—	—
全國合計	一一八	一二八

の報告あり。

尙シムキン（一九二六年）に依れば現下尙頗る多く各般の施設を進め居れりと云ふ。

チプルス（英領）も亦本病を屆出しめつゝあり。往時本病多かりしシリアに隣接せる地帶丈今尙本病あり（國際年報）

四　メソポタミア（イラツク）及ペルシア

兩者共劇しき「トラホーム」流行地にして、殊にイラツクのバグダツトにては人口二七〇、〇〇〇中八〇％本病に罹り、民衆視力に永久の傷手を蒙らしめつゝあり。文化保健協會の手術したる患者

一九二三年　四七七人
一九二四年　三八七人

又一九二三年バグダツト市立「トラホーム」病院にて取扱ひたる新患者九七二一人、一九二四年には一六、八三八人に及び年々增加の傾向あり。

五　アラビア

アラビアには現時尙往昔の如く（オスバリユーは總てのアラビア人にして「トラホーム」の瘢痕なきものなしと云へる位）多し。（河本）殊に殖民の五分の一は眼病患者なりと云ふ。

六　中央亞細亞

Van. Millingen によれば「トラホーム」の最多地とも云ふべく全住民の九〇〇％は本病なりと云ふ。

七　東印度

Hirschberg によればカルカツタよりボンベイに多く、全眼病患者の一〇〇——六〇％なり、ゼイロンには「トラホーム」なしと。アルキペンはズダン島と共に「トラホーム」多き地に屬す。

カスラーに依れば歐洲人の兒童もジヤワのスマランに於ては三四・％の罹病率を示せり。

八　印度支那

Anamiten には三〇——九〇％平均六八・五％の罹病あり。而して最も多きは低部デルタ地方最も少なきは山間なり。「トラホーム」を經過せるもの三八・七％、合併症を有するもの〻三二・七％は內耳炎症なり（バルギー一九二七年）

九　支那

廣東にては七〇％の「トラホーム」あり。近時ブツクス（一九二五年）は支那學童「トラホーム」を檢し其二五％は本病に罹り居る旨を報告せり。

第三　アフリカ及一埃

此れ等の地方は有名なる「トラホーム」國、盲者國、眼病國なるのみならず「ナイル」河の下流に在りては羊、犬、牛馬迄も眼病と盲目とに襲はれ居れりとのことなり。

Primer は一八三一——一八六〇年間教授、病院長、侍醫等を爲したる醫師なるが其「東洋ニ於ケル疾病」に錄して曰く

「眼炎は各地に蔓延せり。上部埃及から既に多く下部埃及に至りては里謠の如く、デルタにては土着人中健眼を持てる者は少數に過ぎず。如此有樣にて眼病は全く土着的に流行し時々大流行をなすこと赤痢の如し云々」と。

Tachau（一八九五年）の計算に依れば全眼病患者の七五％は本病なりと云ふ。又 Hirschberg はアレキサンドリアよりエジプトを經てヌビヤの境に至る迄土着人の眼禍に罹れることは皆同一なりと評せり。

Fuchs（一八九四年）は埃及の下層階級にありては「トラホーム」に罹らぬもの一人もなしと云ひ、ナイル河を上行するに從ひて遞減し、病勢亦衰ふと云へり。

Schmidt, Limpler カイローに於て一〇〇人の「トラホーム」患者中新らしき顆粒を有するもの一人もなく何れも既に瘢痕「トラホーム」となり居れることを報告す。

Van Millingen は「エジプト」人四、〇〇〇人中「トラホーム」患者三、二〇〇人即八〇〇％と報ぜり。

Morax 及 Lakah（一九〇一年）は「眼を返す毎に「トラホーム」患者ならざるはなし」と云ひ、且土着の學校兒童を檢診せしにアレキサンドリアの學校に於ては八〇〇——九三〇％なりと報告す。

Mc. Callan はタンタに於て移住民の「トラホーム」患者三、二〇〇人即八〇〇％と報ぜり。

そは Leopold Müller にして氏は一八九八年自己の發見に係る病原菌研究の爲埃及に滯在し「毎年氾濫的暴發時に見る眼炎は初めアラビヤの醫 Saad Sameh la Conjunctive Suraague と名け、今日一般に Conjunctivitis acuta Contagiosa と稱し、且コホウキークス菌に依るものなりし」とせり。此れ亦信を置き難か如し。蓋し同地に於ける「トラホーム」は既に大家の診定したるものなるのみならず、混合傳染は常に發見せらるゝ處。加ふるに一八九五年 Tachau の跡を受けてアレキサンドリアに赴任したる A. Osborne も其の滯在五年間の經驗より「總てのアラビア人にして「トラホーム」の痕跡を持たざるものなし」と報告せる位なるを以てなり。

又ナイルより西アフリカの北海岸にも同樣に多く、佛醫 Viger アルギール、ツニス地方の住民は一〇％本病の爲失明、二五——三〇％作業不能ある旨を報ぜり。之れに反し同佛醫 Gros は前記 Müller と同樣の意見を發表せりとのことなり。

貧者　七〇—七五％

中流		五五—六〇%
富者		三五—四〇%
モハメット教徒		八六%
コプト族		八五%
ユダヤ人		九二%
黒人		六〇%

と報告し同年 Millingen は

と記載せり。

埃及地方に於ける狀況に關し、河本博士が「トラホーム」豫防協會發會式席上演述せられたる處に依れば、今日と雖も尙多數患者あり、乍然英本國及有志の醵金に基き大々的豫防並に治療措置を講じつゝあるを以て、漸次減退しつゝあるものと見るべく、前述學校「トラホーム」減少も亦此の想像を起さしむ。

二　ツニシア、トリポリー及モロツコ

近時アフリカのツニシアに於ける「トラホーム」の報告あり。一九二三年（國際年報）

檢診人員	六、三三七人
患者	三、〇〇〇人
卽	四七・五%

にして、今日尙此の地方に患者多數なるを知る資たらずとせず。殊に最近の報導（一九二六年ウヰギール）に依れば、同國軍隊は瘢痕「トラホーム」を新兵として採用する爲一八・三%の本病あり、之れに反し海軍は不採用主義なる爲五〇・〇%の損失を見ると云ふ。

トリポリーにも本病多し（河本）

又モロツコに於てはユダヤ人四〇・〇%、同小兒五・〇%（一九二六年）ある旨報告あり（ディラノエ、十二年間の經驗より）。

三　アルゼリア及南亞弗利加聯邦

アルゼリアには一九二三年八・〇——一〇〇・〇%の患者あり Dodicar 其他南亞弗利加聯邦に於ても本病を屢出要傳染病とせる處を見れば相當發生あるものと見るべく、河本博士も亦患者多數の意味を述べ居れり。

四　南亞殊にトランスバール及カツプ殖民地

眼病患者の半數は「トラホーム」患者なりと云ふ Levvko Witsch 一八九七年）。

第四　オーストラリア洲

當地の「トラホーム」は主として外國出稼者より移入せられたるものとせらる。實際少なきものゝ如く殊にニユージーランドにては人口一、四五〇、〇〇〇中一九二五年二九名の屆出あり。

一　ハワイ

大正八年內務省の調査に依ればホノルル市二、三の公立學校生徒一〇八四七人に就き調査の結果一人の「トラホーム」を發見せるに過ぎずと云ふ。

第五　北亞米利加

一　北米合衆國

屢々「トラホーム」の蔓延を經驗せるが主として移住者より移入せられたるもの（Edward Davis は一九〇二年統計にて證明せり）にして、多くはアイルランド及スカンヂナビアよりの移住者により蔓延せりと傳へらる。然れども一九一二年ミネソタ州の本病調査に當りたる T. Clark は四十年前尙それ以前よりありたるものとなし、尙同年ケンタツキー州にて調査したる Mc, Mourain は最古の住民記憶以前より土人間には存在せる旨を發表せり。兎に角「トラホーム」患者の入國を禁じて以來減少せりと云ふ。

一九〇二年頃イリノイズ州に於ける「トラホーム」は當時金眼病患者に對して六五%なり。

Pusey に依れば西部ケンタツキー州にては却つて白人に多しとあり。Gilliian（一八九七年）はニーヨークの家なきものゝ避難所の住者八〇〇人を檢査し三二五人卽四〇・六%の「トラホーム」を發見せりと報告す。

H. B. Ellis は南部カリフオルニヤ州に於ては〇・五——一・〇%を移動せりと。

ミシシツピー流域には相當に多し。

軍隊「トラホーム」は殆んど皆無に近きこと如次、

合衆國軍隊「トラホーム」

一八九五—九七		同國陸軍衞生部發表		
一八九五	〇・三四	同	P.M	兵員
一八九六	〇・〇四	同	同	同
一八九七	〇・〇八	同	同	同

現在合衆國は其二十九州丈本病屆出の義務を課し居れるが內一九二五年患者の屆出ありたるもの二十六州何れも極めて少數なり。

然し州によりては山稼勞働者並に其家族學童の間に（黒人のみならず白人にも）相當の流行をなし、識者の注目を曳きつゝあり、例へば

一九一二年	ケンタッキー州東部山間印度學童	七・〇％	（公衆衛生年報一九二三年）
同	ケンタッキー州東部山間印度人	一二・五％	ジェー、マックムーレン
	或る家庭にては	六〇―七〇％	（合衆國年報）
	ミネソタ州印度人	四六・一％	アフェロ、クラーク
同	同學童	三〇・七％	（合衆國年報）
	メサバ山鑛夫	二・七％	
一九二五年	「インデアンサーキヴス」より	五〇・〇％	フォックス

の如く一九一二年以來（此の頃より大々的調査並に活動開始）治療的活動を餘儀なくしたる州は

ケンタッキー	ミゾリー	
ミネソタ	アルカンサス	
オハイオ	ノースダコタ	
テンネシー	ジョージ	
アリゾナ	イリノイズ	
ウエストバージニア		

等にして主として山間勞働部落の黒人並に一部白人をも犯しつゝあり（一九一二年――一九二四年「アンニュアルレポーツ」）

各州にては之が爲病院を設立、一九一七年には六ケ所に及び其取扱患者

一九一七年	一八四三〇	（合衆國年報）
一九二三年	八八四五	（同　　）
一九二四年	六八一三	（同　　）

にして遞減せり。又

アリゾナ州學童	一九一六年	五・〇五％	合衆國年報
	一九一七年	三・二四％	

更にミネソタ州山稼勞働者に就き一九一二年――三年及一九二二年檢査したる成績は次の如く（公衆衛生報一九二三――一九二四年）

	白人	黒人
一九一二―三年	〇・五一％	一五・三四％
一九二二年	〇・三％	六・〇％

にして一見良好なる成績を示せり。蓋し州行政廳が各種の豫防施設殊に病院無料治療等を行ひたる效果と見るべし。

尚最近（一九二六年）同地方を旅行したる向井（醫博）の報告によれば紐育眼病院の昨年中の急性患者五〇名、慢性二一七名、マンハッタン眼病院にては一四五名内「パンヌス」四〇名を取扱ひ、バルチモーアのジョンスホプキンス大學にては「トラホーム」は一七％黒人にては七〇％を算すとのことなり（中央眼科醫報第十九卷第一號）

以上の如く北米に於ける「トラホーム」は主として黒人間に蔓延せるも而も亦白人をも襲へるのみならず、近時山間勞働地帶にては黒白人間の交渉は學校其他下層勞働者の往復等に依り漸次親密を加へ爲めに白人間に擴らんとする形勢を示す等、衛生問題として重きを爲し、行政廳も之れが撲滅に力を致しつゝあり。

二　墨　國

沿岸地帶には氾濫的蔓延あり。（ヴユレッシュ一九二六年）

三　加　奈　陀

同國にも本病あり。Foucher に依れば（一八九七年）加奈陀のモントレールに於て一三、八六五の眼患者中四九九「トラホーム」患者即三・六％を發見し、且其際エスキモー」人種及加奈陀の印度人には全然本病なく結核と同じく免疫性なることを認め居れり（此の點は曾て Burnett の報告と正反對なり）。尚マニトバに於ける露西亞人は頗る不良條件下に生活せる丈羅病濃厚なり。

第六　南亞米利加

一　ブラジル

南亞米利加中最も多くアフリカ西海岸の奴隷船により移入せられ歐洲よりの移民も亦「トラホーム」移入の原因ならん。

二　アルゼンチン

全共和國に蔓延し同地の「トラホーム」は恐らく一八一〇年頃スペイン沒落後初めて潜入せしのみならず他に多數歐洲兵がナポレオン一世の遠征に從ひし事も大なる關係を有せしならん、現時尚土着的にありと云ふ。

三　ボリヴヤア

「トラホーム」は稀なり。Gaffron は長月間此の地を旅行し四五五人の眼病患者を診察せしに一人の「トラホーム」患者もなかりきと云ふ。

四　チリー

同國の「トラホーム」に關し詳細なる記錄なきも國際年報に依れば一九二五年八四人の屆出あり、相當發生あるならん。

國名	報告地	患者割合％ 對民	患者割合％ 對眼	報告者	年代	備考
獨逸						
ケーニヒベルヒ						
同						
オストプロイセン	（東普州）		一三・四三	パッハ	一八八八—九二	一、括弧ハ平均ナリ
プロイセン	（西普州）		一五・四	クーント	一八九一—九七	二、括弧内ノ％ハ及平均ノ％ノ平均ナリ
ウエストプロイセン	（各州）	五・七		クーント	一八九七	三、對民ハ一般住民對患者割合對眼ハ眼患者對割合ヲ示ス
肥前ナシ高等學校		四・五		グレーフ	一八九八	
			五八・三	シュネッレル	一八七五—九三	
市學校		平均五—一〇・〇（七・五）				
同		一〇—一五・〇（一二・五）				
倉學校		二〇—四七（三三・五）		ヒルシュベルヒ	一八七五—九三	
ヘッセンナッソー		一・三—一〇・四（六・〇）				
ウエストファーゲン地方		四・一				
ハンノーバー		一・三—八・三（五・〇）				
東普（オストプロイセン）		八・三				
ポーゼン		三・四三—一五・四（一四・五）		ヒルシュベルヒ、ザットレル、クーント、フオツシュウス、グレーフ、	一八七五—九三	
西普（ウエストプロイセン）		一三・〇四				
シュレージエン		二・二—八・〇（五・〇）				
ザクセン		二・二—一・六（一・六）				
シュレースウイヒホルスタイン		〇・六—二・六三				
ホンメルン		一・一				
		〇・二				

國名	報告地	患者割合％ 對民	患者割合％ 對眼	報告者	年代	備考
オストプロイセン			一三・四三			
ウエストプロイセン			五・八三			
ポンメルン			一・一〇			
ポーゼン			一三・四			
シュレージエン			二・二—九・〇（五・六）			
サクセン			〇・六—二・六三（一・五）			
シュレースウイヒホルスタイン			一・一一			
ハンノーバー			八・三一			
ウエストファーゲン			四・一二			
ライン地方			一・二八—八・二八（五・〇）			
ヘッセンナッソー			一・二八—一〇・三八（六・〇）			
獨逸	平均		（七・二三）			
露國			（二九・〇四三）			
クリミヤ			二〇・一			
ベサラビヤ			一七・五			
ワルソー			一二・四			
リーブランド			三三・二			
クルランド			四三・一			
カザン			四九・六			
フインランド			一〇・二			
ペテルスブルク			九・五			
モスコー			八・六			
クルスク			五〇・三（三〇・〇）			
不明	平均		一〇—五・〇			
村落學校			六二・〇			
南部リーブランド學齋			二三・八			
シベリア（トムスク行政區）			一〇〇・〇（殆ンド）			
				フオツシウス	一八九四	
				ヒルシユベルヒ、ポツチコウスキー	一八二五頃	
				オエールン	五六—五九	
				ライヘル	五六—五九	
				同	五六—五九	
				ケルシユバウマー夫人	一九〇〇	

國名	報告地	患者割合％ 對民	患者割合％ 對眼	報告者	年代	備考
露國	モスコウ		二・四—四・〇（三・二）	ヒルシユベルヒ	一九〇〇	
	ペテルスブルグ		六・〇			
	フエルデインゲフオールス		九・六			
	サラトウ		一〇・二			
	ロツツ		一一・四			
	リウバウ		一一・六			
	ルソー		一二・一			
	レバール		一二・四			
	ドルパート		一四・六（二七・〇）—三五・〇			
	リガー		一八・〇			
	カザン		二〇・〇（二二・〇）—二五・〇			
	キユー		二五・〇			
	ペサラビア					
總平均		（三二・二七）	（一四・八六）			
ダルマチエン		八・四四				
トライスト及チロール		四・〇				
ボスニア及ヘルツエゴヴイナ		四・〇				
ヴエーメン		四・〇				
ガリツヤ		一一・〇				
エルプ平野			（一三・〇）—一四・〇	ライヤンゲル	一八九七	
ベヨーメン				バイエル	一八九七	
ガリツヤ		一・七				
ウエルスチロール						
ノルドチロール			二八・五	レンベルヒ病院	一八九二—九八	
			四・〇			
			〇・四			

ザルツベルグ			〇・七	フオンロイス	一八九二—九八	
オーバーオエステルライン			一・五			
ケルンテン			一・二			
スタイヤーマーク			三・〇			
クライン			六・七			
ダルマチエン			八・四四			
ベヨーメン			四・〇			
ウキーン			三・六			
西シユレージエン			一・〇			
東シユレージエン			四・〇			
西ガリツヤン			一・一			
東ガリツヤン			一・一			
總平均		（五・五三）	（五・一四〇）			
トランスレタニア	トロンタール地方	五・〇		フオイヤー	一八九五	
トルコ	コンスタンチノープル		一八・三	ミルリンゲン	一八九〇	
ルーマニア	ジヤツシヤー		五二・〇	クレイニショウ	一八九〇	
	ブツカレスト		一〇・〇（四〇・〇）	同		
	モルドー（北方）		三〇・〇—五〇・〇		一八九〇	
總平均			（三四・〇）			
ブルガリヤ人		四四・〇		ミルリンゲン	一八九〇	
ルーマニア人		六八・〇				
ギリシヤ人		四五・〇				
トルコ人		六〇・〇				
總平均		（五〇・九）				

國名	報告地	患者割合% 對人	患者割合% 對眼	報告者	年代	備考
セルビア	?	?	?	?	?	
ギリシヤ	多					
イタリー	二二九地方	(二〇・〇)〇・二—三・六		ミニチー	一八九一	
	ゲメア		一一・〇	パツソー	一九〇一	
	ロンバルデー		一二・六	同	一九〇一	
	サルヂニア及シシリア			同	一九〇一	
	パレルマ	三・六六	四九・一	カラリー	一九〇一	
	レルマ		五五・〇	マルツエツチー	一九〇一	
總平均		(三・〇)	(三二・九)			
スペーイン	ビルバオ	(五・五二)六・四—四七		ヒルシユベルヒ	一九〇一	
	バルセロナ	(九・一五)六・三—一二・〇				
	サンセバスチアン	一・二				
	マドリツト	(六・五)				
	バラドリード	五・〇—八・〇				
	シエビラ	二六・七				
	カデイツツ	一〇・三				
		九・〇				
總平均		(九・七七)				
ポルトガル	リサボン	一二・〇		ガマ、ピント	—	
スウイツツル	—	極少		バウエル	一八九九	
フランス	南地中海沿岸ノメントペリール	一〇・五	不明			

パリー	一・七〇				一九世紀	
總平均	(六・〇)					
ベルギー	ブルツセル	八・〇		シブレー	一八八一—九〇	
	リエン	四・〇				
	アントワープ	一〇・〇				
	ツウルナイ	一四・〇				
	モンス及ナモール	五・〇				
	クルトレー	八〇・〇				
	リンブルグ	二七・八				
總平均		(二一・三)				
オランダ	平均	四・〇		ミルリンゲン	十九世紀	
	アムステルダム	四四・〇		リツター	一八七五	
	同	一四・七		同	一八九六	
總平均		(二〇・九)				
イギリス	イングランド		〇・六	シドネー		
	スコツトランド		〇・九三			
	アイルランド		二・六四	ステフエンソン	十九世紀	
總平均			(一・四)			
デンマーク	スウエーデン			ミルリンゲン	十九世紀	
スエーデン	ノールウエー	〇・二三				
ノルウエー	デンマーク	〇・二五				
總平均		(〇・二五)				
ポーランド	—	多	同			

國名	報告地	患者割合% 對民	患者割合% 對眼	報告者	年代	備考
エストニア	—	多	同	クリクス	—	
スミルナ	—	多	同	—	—	
シリア パレスチナ	シリア パレスチナ	— —	一五・〇〇 五一・一八	— —	— —	
總平均	—	—	（三三・一）	—	—	
アラビヤ	—	頗多	—	オスバリウ	—	
支那	廣東	七〇・〇	—	—	—	
北米合衆國	イリノイズ州 ニューヨーク避難所民 カリフォルニア州	— 四〇・六（〇・七五） 〇・五—一・〇	六五・〇 — —	マツクムーレン ギルフイラン エッチビーエリス	一九〇二 一八九七 —	
總平均		（二〇・七）	—			
カナダ	モントレール マニトバ	多 —	三・六 —	フオイヤー —	一八九七 —	
ブラジル	—	多	—	—	十九世紀	
アルゼンチン	—	多	—	—	十九世紀	
ポリビヤ	—	稀	—	—	十九世紀	

國名	報告地	患者割合% 對民	患者割合% 對眼	報告者	年代	備考
獨逸	東普（オストプロイセン）	三・六〇	—	國際年報	一九〇五	
	オストプロイセン	四・二二	二	ヒルシユフエルド	一九一七—二四	
	ケーニヒスベルヒ大學	—	—			
	クライフスワールド大學	—	三〇・〇	向井	一九二五	
	プレスラウ大學	—	一五・〇			
			四・〇			
總平均		（三・九一）	（一六・三）			
露國	ヤドリン	三三・九八	—	Dear W. R.		
	チビルスク	三〇・一〇	—	Milit. Surgeon		
	ツエオキサリー	二六・八一	—	Bd 58, No 6		
	コツモデイーミアンスク	二三・三六	—	1926		
	カザン（ガウアーンメント）	一七・四四	—			
	チユヴツシユ聯盟	七五・〇〇	—	クスリヤンスカヤ	一九二三	
	サラトーガヴーンメント	四五・八〇	—	チルコースキー	一九二三—二四	
	ウオルガ地方	七一・四〇	—	チトー、イクトスキー	一九二四	
	イクト地方	三九・〇〇	—	イソノフ	一九二六	
	西伯里亞學・童	三・二—一・二〇（七・二〇）	—	同	一九二六	
	プルヤット民族	三〇・三〇	—	同	一九二六	
	同農民部落	一一・〇〇	—	ツエブリン	一九二三	
	西伯里亞シラ地方	九三・〇〇（三七・〇〇）	—	ロードスタイン	一九二六	
	ポリソー地方	三五—三九・〇〇	—	ロシオル	一九二六	
	同	九七・〇〇	—	サポスチナ	一九二六	
	サラドー學童	八・六〇	—	パリシユニコフ	一九二三—二二	
	サラドーガヴーンメント	七・〇〇	—			

國名	報告地	患者割合% 對人	患者割合% 對眼	報告者	年代	備考
露國	クーバン コーカサス	多	—	ギュールナサルヤン エヤボースキー	一九二七 一九二七	
總平均		(三八・五)				
フインランド	—	一・五—五・〇	(二・三〇)	不明	一九〇八—二四	
オーストリヤ	ハーゲンランド學童 ウーイン大學	一五・〇—二五・〇	(二〇・〇〇)	國際年報 向井一	一九二五 一九二五	
ルーマニア	軍隊	(一般民衆多)	(一・六〇)	—	一九一〇	
ギリシヤ	—	多		—	—	
イタリー	ローマ大學 カタニア學童 同 タラント學童 サルディニア島 ローマ	二七・五 (一五・七) 九・〇—二二・七 二〇・三七 二〇・〇〇	五・〇—七・〇 (六・〇)	向井 モルガノ 同 Z. f. O. Bd. 17. マギオール シコロー	一九二五 一九一九—二三 一九一九—二三 一九二四 一九二六 一九一八以來	
	ルーダ島	—	—	—	—	
總平均		(二〇・九)	(六・五)			
スペーイン	? ? アンチアゴー州 ジユジユイ州	— — — —	八・七 一・四二—(三・六) 五・六六 五一・一〇 三・〇	ウエスカンプ ツアアリヤ、アルベルト リツシエルドロツプ、マルセロ 同	一九二五 一九二七 一九二七 一九二七	

ソレオン	リス	— —	八・九〇 一・四二	アルバレツト	一九二六	對民對眼不明
總平均		—	(一二・八)			
ポルトガル	?	—	五・〇—(一七・五) 三〇・〇〇	マムチノ マリオ	一九二四	
スウイツル	—	極少	—	國際年報	一九二五	
フランス	—	少	同	國際年報	一九二四	
ベルギー	?	少	同	?	?	
オランダ	學童 同 クリスト教徒 同 ユダヤ人	四五・八 四・一 〇・六八 〇・一八 五・〇〇 三・九一	— — — — — —	國際年報 同 同 同 同 同	一九一四 一九一九 一九一七 一九二三 一九一七 一九二三	
總平均		(九・九三)	—			
チエツコスロヴキア	—	一・五五	—	國際年報	一九二五	
ポーランド	學童 東部中西部 ソルソー大學	三三・〇〇 多 —	多 一〇・〇	衞生年報 國際年報 向井一	一九二四 一九二四—二五 一九二五	
P. P. R.	—	頗多	同 同	—	—	
エストニア	—	有	同	クリクス	一九二五	

國名	報告地	患者割合% 對民	患者割合% 對眼	報告者	年代	備考
リツウアニア及ザール地	—	多	一〇・〇	國際年報	一九二一—二五	
ウクレイン	—	多	同	國際年報	一九二四	
シリヤパレスチナ	—	多	同	シムキン	一九二六	
チプルス	—	有	同	國際年報	一九二五	
メソポタミア及ペルシヤ	—	多	同	國際年報	一九二三—二四	
アラビア	—	頗多	—	河本博士	十年以前	
印度支那	—	六八・五	—	バルギー	一九二七	
支那	學童	二五・〇	—	フツクス	一九二五	
中央アジア	—	九・〇	—	ミルリンゲン	—	
東印度	カルカツタ ボンベー ジアヴア	三・四（歐洲兒童）	六・〇—一〇・〇（八・〇）	ヒルシユベルヒ カスラー	— — —	
エヂプト	アレキサンドリア學童	八〇・〇—九三・〇（八七・〇）	七五・〇	タツチヤウ ミルリンゲン	一八九五 一八九五	
	貧民移住者	七〇・一—七二・五（七五・〇）	—	モーラツクス、カラ	一九〇一	
	タンタ	九六・四三	—	マツク、カルラン	一九〇一	
	中流	五五・〇—六〇・〇（五七・〇）	—	ヤコビ、エス	一九〇三	
	富者	三五・〇—四〇・〇（三七・五）	—	ミルリンゲン	一九〇三	
	モハメツト教徒	八六・〇	—			
	コプト族	八五・〇	—			
	ユダヤ人	九二・〇	—			
	黑人	六〇・〇	—			
總平均		（七五・四）	—			
トランスバール及カツプ殖民地	—	五〇・〇	—	リユーコーウイツチユ	一八九七	
ニユーヂーランド	—	極少	同	國際年報	一九二五	
ハワイ	—	極少	—	內務省（日本）	一九一九	
埃及	—	頗多	—	—	—	
ツニシヤ及トリポリ	新軍檢査兵	多	—	國際年報	一九二三	
	海トリポリ	一八・三 五〇・〇	—	ウイギール	一九二六	
		多	—	同	一九二六	
			—	河本博士	十年前	
總平均		（三四・一五）	—			
アルゼリヤ	—	八・〇—一〇・〇（五四・〇）	—	ドデイーヤ	一九二三	
南亞聯邦	—	頗多	—	河本博士	十年前	
モロツコ	ユダヤ人 同小供	四〇・〇 五・〇	— —	デイラノイ	一九二六	
總平均		（二二・五）	—			

國名	報告地	患者割合% 對民	患者割合% 對眼	報告者	報告年代	備考
	ケンタッキー州（インド學童）	七・〇		國際年報	一九一二	
	同州（山間インド人）	一二・五		マックムーレン	一九一二	
	或ル家庭	（六五・〇）六〇・〇—七〇・〇				
	ミネソタ印度人	四六・一		アフエロ、クラーク	一九一二	
	同學童	三〇・七				
	メサバ鎮夫	二・七				
北米合衆國	インデアンサーヴイスヨリ	五〇・〇		フオックス	一九二五	
	アリゾナ州	五・〇五		合衆國年報	一九一六	
	同學童	三・二四		同	一九一七	
	ミネソタ州白人	〇・五一				
	同白人	〇・三（一〇・七）				
	同黑人	一五・三四—六・〇		公衆衛生報	一九一二—一三	
	ジョンスホプキンス大學白人				一九一二	
	同黑人				一九一二—二二	
			一七・〇	向非	一九二五	
總平均		二〇・三二				
メキシコ	滑岸	顔多		ヴユレツシユー	一九二六	
チリー		少		國際年報	一九二五	